

原 著

精神科病院における精神科看護職者の暴言・暴力を起こす患者に対する 介入方法：文献検討を通じて

井上 誠, 麻生 浩司

県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学コース

(2021年12月9日受付)

要旨：目的：文献検討を通じて、精神科に勤務する看護職者として暴言・暴力を起こす患者への介入方法、技法を抽出し、どのような看護介入が有効なのか検討した。

方法：文献検討は、「医学中央雑誌」および、「CiNii」を検索媒体として使用した。「精神科」「暴言」「暴力」に関する過去10年間の文献数の推移について検索後、過去5年間（2020年から2016年）精神科における看護介入研究に発表されている論文を抽出した。

結果：過去10年間（2020年～2011年）の文献数の推移をみる為、キーワードを含めた文献数は、「医学中央雑誌」では102件、「CiNii」では103件、合計205件確認した。「科研費抄録」「発表抄録」「解説/特集」「抄録のみ」を除外し、更に「医学中央雑誌」と「CiNii」で重複している文献を除外すると95件が解析対象となった。

考察：精神科に勤務する看護職者に対してどのような患者が暴言や暴力を起こすのか、暴言・暴力への介入方法や技法には、暴言・暴力の回避知識をもつことにより、自己の精神状態安定への予防策になると思われる。

結語：本研究では、文献検討を通じて、暴言・暴力を起こす患者に対する介入方法、活用できる技法を抽出し、整理したことで、精神科看護職者が行う有効な回避方法について示唆を得ることができた。

(日職災医誌, 70:119—123, 2022)

—キーワード—

精神科, 暴言, 暴力

はじめに

病院・施設において看護職者が暴言・暴力を受けることはよく知られている¹⁾²⁾。患者が看護職者に対して暴言・暴力を行う背景として、入浴や食事など日常生活の制限、他患者との共同生活などの制約によるストレスがあげられる³⁾⁴⁾。また、一日の大半を病室という限られた場所で過ごすため、日中の活動も制約される。普段の生活習慣とは異なり、また異なる環境の中で自由を束縛され、病気が思うように回復しないことで、健康な者に対する嫉妬やいらだちといった感情を生みだしやすくなることも指摘されている⁵⁾。これに対して看護職者は、「何でも聞いてくれる人」「どのようなことでも受け入れてくれる人」と位置付けられることが多いことから、嫉妬やいらだちのような感情が看護職者に対して暴言・暴力となって顕著化すると考えられている⁵⁾⁶⁾。

特に、精神科で勤務している看護職者（以下、看護職

者と称す）は、精神状態が悪化して言語的コミュニケーションを図ることが難しい患者に看護介入を行わなければならない場合が多く、入院患者から攻撃的言動を受ける頻度が高い⁷⁾。暴言・暴力を受けた場合、看護職者はしばしば「仕事の一部」として虐待や暴力に無抵抗に感じてしまうケースもある⁸⁾。このため、暴言・暴力を受けた看護職者の対応は被害を公けにしない傾向にあり、暴力を受けた看護職者の心理的側面に与える影響やその対処方法が問題視されている⁹⁾。さらに、暴言・暴力を受けた時、「暴言・暴力が起こったのは自分のせいだ」「興奮させた」「対応が悪かった」など、大きなダメージを受け、傷つき、悩み、自信がなくなり自己嫌悪に陥ることもあるという¹⁰⁾。看護職者は24時間、患者の最も身近な職種であるがゆえに、暴言・暴力と直接向かわざるを得ない。重要なことは患者と看護職者の安全であると言われている¹¹⁾¹²⁾。

したがって、文献検討を通じて、精神科に勤務する看

表 1 2020～2011年掲載誌・研究内訳・研究方法

| 掲載年 | 掲載誌 | | | 研究内訳 | | | 研究方法 | | | | | |
|------|----------|-----|-----|------|----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|-------------|-----|
| | 大学 紀要 | 月刊誌 | 学会誌 | 原著 | 研究 報告 | 資料 その他 | 質問紙 調査 | 症例 研究 | 文献 検討 | 面接 調査 | 解析・ 実態調査 | その他 |
| 2020 | 3 | 0 | 2 | 2 | 2 | 1 | 2 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 2019 | 2 | 0 | 12 | 12 | 2 | 0 | 3 | 7 | 0 | 0 | 1 | 3 |
| 2018 | 0 | 2 | 7 | 9 | 0 | 0 | 4 | 4 | 0 | 0 | 0 | 1 |
| 2017 | 0 | 0 | 10 | 9 | 1 | 0 | 2 | 3 | 0 | 2 | 3 | 0 |
| 2016 | 1 | 1 | 7 | 5 | 3 | 1 | 1 | 3 | 2 | 1 | 2 | 0 |
| 2015 | 0 | 0 | 10 | 9 | 0 | 1 | 2 | 6 | 1 | 0 | 1 | 0 |
| 2014 | 0 | 0 | 9 | 9 | 0 | 0 | 3 | 4 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 2013 | 0 | 0 | 10 | 10 | 0 | 0 | 0 | 9 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| 2012 | 3 | 0 | 7 | 6 | 2 | 2 | 4 | 3 | 1 | 0 | 2 | 0 |
| 2011 | 3 | 1 | 5 | 8 | 0 | 1 | 4 | 2 | 0 | 2 | 1 | 0 |
| 合計 | 12 | 4 | 79 | 79 | 10 | 6 | 25 | 42 | 6 | 7 | 11 | 4 |

護職者として暴言・暴力を起こす患者への介入方法、技法を抽出し、整理することを目的とし、どのような看護介入が有効なのか検討した。

研究方法

文献検討は、国内で発行されている、医学・薬学・歯学および看護学・獣医学などの医学関連領域、約7,500誌（累計）の定期刊行物から年間30万件以上の文献情報が採録されている、「医学中央雑誌」および、「CiNii」を検索媒体として使用した。文献検討作業は、2021年8月～10月に実施した。

文献は、「原著論文」「研究報告」「解説」「学会抄録」を検索して採用した。「精神科」「暴言」「暴力」に関する過去10年間の文献数の推移について検索後、精神科看護における介入研究に関する論文は、2020年から2016年までの5年間に発表されているものとした。第一段階では、「精神科」「暴言」「暴力」、第二段階として「精神科看護」「暴言」「暴力」のキーワードで検索した。

分析方法

第一段階のキーワードである「精神科」「暴言」「暴力」で検索した文献の表題を「介入研究」「事例研究」「調査研究」「報告」「抄録」「解説/特集」のグループに分類して、掲載数の年次推移と内容をみながら検討した。第二段階として、「看護」のキーワードを追加して検索し、精神科看護における暴言・暴力における介入・回避方法などに着目し、文献を掲載順に番号化し、著者、掲載雑誌名、論文の種類、ページ数、掲載年、研究方法、研究対象者、研究概要、研究内容について検討をおこなった。調査内容や介入内容などが明確でないもの、実態調査、報告書、議事録などについては除外した。研究内容について、それぞれ要約をおこない、抽出したキーワードを基にワークシートを作成した。内容については臨床経験10年以上ある共同研究者、スーパーバイザー1名に依頼して抽出作業を実施した。

研究結果

1) 「精神科看護」「暴言」「暴力」に関する過去10年間の文献数の推移

初めに、「医学中央雑誌」「CiNii」によって、「精神科看護」「暴言」「暴力」のキーワードにて絞り込みを行い、過去10年間（2020年から2011年）で「医学中央雑誌」では102件、「CiNii」103件が検索され、合計205件であった。「科研費抄録」「発表抄録」「解説/特集」「抄録のみ」を除外した。そして、「医学中央雑誌」「CiNii」で重複している文献を除外すると95件が解析対象となった。

2) 過去10年間（2020年から2011年）の「精神科看護」「暴言」「暴力」に関する掲載数と研究の内訳

掲載年別文献数は2020年5件、2019年12件、2018年9件、2017年10件、2016年9件、2015年10件、2014年11件、2013年10件、2012年10件、2011年9件であった。最多掲載年は2019年、次いで2014年であった（表1）。

研究内訳は「原著論文」79件、「研究報告」10件、「資料・その他」6件であった。研究方法の内訳は「症例研究」45件、「質問紙調査」25件、「文献検討」6件、「面接調査」7件、「解析・実態調査」11件、その他1件であった（表1）。

3) 過去5年間（2020～2016年）における研究対象者と介入内容

抽出した論文から、より現在の社会情勢に近い環境に絞る為に、過去5年間の論文を原著論文、介入研究のみ精査した結果を以下に示す（表2）。

(1) 対象者の性別と年代、疾患

研究対象者の性別と年代は女性8名、男性6名であった。年代は10代3名、40代1名、50代1名、60代1名、70代5名、80代2名、90代1名であった。症状は、アルツハイマー型認知症6名、C型肝硬変・肝性脳症・認知症1名、知的障害1名、発達障害1名、せん妄1名、高次機能障害1名、自閉スペクトラム症1名、統合失調

表2 精神科において暴言・暴力を起こす患者に対する介入内容

| 代表著者 | 掲載誌 | 頁 | 掲載年 | 介入・研究方法 | 性別/年代 | 対象者の疾患 | 介入内容 |
|-------|--------------------|---|------|--|----------|--------------------|--|
| 丸岡 大介 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 5 | 2020 | アンガーコントロール トレーニング 症例 | 男性/10 歳代 | 知的障がい | 知的障がい者一例に対しアン ガーコントロールトレーニング を適用し、そのプロセスを振り 返り、プログラムの効果につい て検討した |
| 石田 充敏 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2019 | 排せつのケア・ 生活リズム | 女性/70 歳代 | せん妄 | せん妄症状が悪化し暴言・暴力 がみられた患者への排泄支援か ら自立し退院へ至った |
| 高谷 和司 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2019 | 排せつのケア・ 生活リズム | 男性/70 歳代 | C型肝硬変、肝性 脳症・認知症 | 退院において、暴言・暴力や排 泄面が課題となっていた70歳代 男性への介入 |
| 永田 絢子 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2019 | スタッフ間での共有 | 女性/80 歳代 | アルツハイマー 型認知症 | 看護職員の具体的な対応につ いてルールをつくり、スタッフ間 でそれを共有して実施 |
| 進藤 明美 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2019 | トークン エコノミー法 | 女性/60 歳代 | アルツハイマー 型認知症 | トークンエコノミー法を用いた 関わりを取り入れた結果、行動 や言葉、自傷行為に行動変容が あった |
| 奥野 亜美 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2019 | パーソン・ センタード・ケア | 男性/90 歳代 | アルツハイマー 型認知症 | 帰宅要求のあるアルツハイマー 型認知症患者に、パーソン・セ ンタード・ケアを実施したかか わりを報告した |
| 三上 千佳 | 川崎市立川崎病 院事例研究集録 | 4 | 2018 | カルテ、看護記録よ り情報収集し、プロ セスレコードを作成 し分析した関り | 男性/40 歳代 | 高次機能障害 | 高次機能障害患者に対しては簡 潔に説明し、患者が一時的にの み理解することを把握した上で 関わるのが大切 |
| 高橋 有記 | 臨床精神医学 | 6 | 2018 | ASDの認知特性に配 慮した複合的なアプ ローチ | 女児/10 歳代 | 自閉スペクトラ ム症 | 母親と個別面接をする際に、本 人のASD特性を振り返った。母 親がASDの認知特性を理解する こと |
| 中村 悟 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2018 | バリデーション療法 | 男性/70 歳代 | アルツハイマー 型認知症 | 患者の自尊心に配慮した下記の 関わり方をスタッフ間で統一す ること |
| 森川 慎也 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2018 | 応用行動分析的介入 | 女性/80 歳代 | アルツハイマー 認知症 | 全職員で統一した対応および応 用行動分析的介入を試みた結果 を報告 |
| 慶野 進 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2017 | 回想法 | 女性/70 歳代 | アルツハイマー 型認知症 | 攻撃性のある患者に対して個人 回想法を行った結果攻撃行動が 軽減され、精神状態の安定につ ながった |
| 亀井 恵子 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2017 | 家族写真・ 写真を使用 | 女性/70 歳代 | うつ病 | 夢ファイルに家族の写真や手紙 を入れ込むことによって患者と 家族の関係性が変化して意欲向 上につながった |
| 山口 由佳 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 5 | 2017 | 面接法 | 女性/50 歳代 | 統合失調症 | 気分変動が激しく暴言・暴力を 繰り返す患者の気持ちの言語化 を促すことの大切さを理解でき た |
| 藤井 浩恵 | 日本精神科看護 学術集会誌 | 2 | 2016 | 支持・ 肯定的な関わり | 男性/10 歳代 | 発達障害 | 自尊心を高めるアプローチ・支 持・肯定的な関わりをおこない、 自信を取り戻し、自尊心を高め るきっかけができた |

症1名、うつ病1名であった。

(2) 研究対象に精神科での看護職者が暴言・暴力に対して行った看護介入の内容は、アンガーコントロール1件、排泄のケア・生活リズムに関する看護介入が2件、その他にスタッフ内で共有して介入、トークンエコノミー法、カルテ・看護記録から患者のプロセスレコードを作成した介入、本人と家族への複合的なアプローチ、バリデーション療法、応用行動分析的介入、回想法、家族写真や手紙を使用した介入、面接法、患者に対して支持的な関わりであった(表2)。

考 察

2020年から2011年までの10年間で「精神科看護」「暴言」「暴力」をキーワードに検索した結果、毎年、数十件

の文献があがっていた。よって、精神科において患者からの暴言・暴力に関する問題は引き続き検討していかなくてはならない課題と思われる。方法としては、質問紙調査、症例研究が多くみられた。症状による個性性を考慮されており、暴言・暴力がある患者への介入方法、技法を検討していくうえで現在に通じるとと思われる。

2020年から2016年までの5年間で「精神科看護」「暴言」「暴力」をキーワードに検索した論文は、精神科病院で認知症の患者が引き起こす、暴言や暴力に対しての困難さや問題と感じている事例が多数であった。現在、精神科における認知症高齢者の入院が増加している。Kitwood Tは認知症患者へのケアに対して、脳神経学的な器質的な変化といった捉え方をする医学モデルに基づいた認知症の見方を再検討し、パーソンセンタードケアとい

う概念に基づくケアの必要性を提唱しているが¹¹⁾、認知症患者の増加に対して専門的に対応できる看護師は少ないことなどが問題になっている¹³⁾。パーソンセンタードケアは、認知症の者の「その人らしさ (personhood)」を尊重するケアである。すなわち、認知症患者の入院に対しては、入院前の詳細な情報収集、入院後のエビデンスを踏まえた行動観察、アセスメントを実施し、それらをもとに介入方法を個別に見出していくことが重要であると考えられる。しかしながら、非薬剂的介入や個別的な対応でも、BPSD (Behavioral and psychological symptoms of dementia) の軽減や消失が図れない場合があり、その際は興奮を助長する過剰刺激を遮断し、BPSDを鎮めるための隔離・拘束が必要となるケースがあるため¹⁴⁾、予想できないトラブルが発生したり、アクシデント、医療事故に繋がる可能性も高いと考えられる。特に、精神科に入院する認知症患者はBPSDの悪化が著しく突発的に暴言・暴力が発生することを前提に看護介入していくことも重要である。また、精神科に入院している認知症患者に対しては、写真や回想法、トークンエコノミー法などを通じて、スタッフ間で有効性の共有を詳細に行っていた。つまり、患者背景に対して、どのようなタイミングで介入を行うことがよいか検討するために、多職種でのカンファレンスを実施し、介入を実践し、アセスメントして共有していくことが、患者からの暴言・暴力を回避する一助になることが明白になった。

昨今、精神科では10代の知的障害・発達障害患者の暴言や暴力が問題視されている。10代の知的障害・発達障害患者は、人間関係や社会的ルールの理解ができずトラブルがおきやすいようである。自尊心が低くなりがちであり、成人しても様々な逸脱行為に及びやすいと言われていることから¹⁵⁾、本研究における文献調査では「怒り」をコントロールしていく方法(アンガーマネジメント)や自尊心を高めるアプローチを行い、自尊感情や精神症状の安定に寄与していた。したがって、個々にあった関わり方を看護職者間で絶えず共有し、患者の症状をみながら、柔軟に実践していくことが求められると思われる。

さらに、統合失調症が要因となる暴言・暴力に対しての看護介入方法をとりあげた報告や¹⁶⁾¹⁷⁾、包括的暴力防止プログラムをはじめとした看護介入方法が報告されており¹⁸⁾¹⁹⁾、今回の文献調査において、気分変動の激しい統合失調症患者に対して自分の気持ちを言語化できるように介入によって精神状態を安定化させる内容の論文が抽出された。

以上、精神科医療における対象は変化しつつあり、認知症患者に対しての看護介入が重要になってくると考える。どのような患者から暴言や暴力があるのか、どのような介入方法、技法が暴言・暴力回避へ繋がるか、これからの多くの情報を精査しながら、解析を詳細に行い、精神科看護の発展に寄与する。

結 語

本研究では、文献検討を通じて、暴言・暴力を起こす患者に対する介入方法、活用できる技法を抽出し、整理したことで、精神科に勤務する看護職者が行う有効な回避方法について示唆を得た。今回は国内の文献に関する医学中央雑誌 Web 版、CiNii をもとにした過去 5 年間の検索結果であり、対象文献が限定された可能性がある。今後はデータベースを拡大してより広く文献検討を行う必要がある。また文献研究では得にくい臨場感のある語りをインタビューから得ていくことや、暴言・暴力の要因や受け取り方を多層的に検討し、近年における暴言や暴力の全体像を明らかにすることが課題である。

[COI 開示] 本論文に関して開示すべき COI 状態はない

文 献

- 1) 谷本 桂：入院患者から暴力を受けた精神科看護師の主観的体験。日本精神保健看護学会誌 15(1)：21—31, 2006.
- 2) Inoue M, Kaneko F, Okamura H: Evaluation of the Effectiveness of a Group Intervention Approach for Nurses Exposed to Violent Speech or Violence Caused by Patients: A Randomized Controlled Trial. International Scholarly Research Network, ISRN Nursing Volume 2011: Article ID 325614, 8.
- 3) 八木唯斗, 山田 遼：精神科病院入院患者のストレス反応の緩和における心理社会的要因の構造と有効な方略の検討。日本保健医療行動科学会誌 36(1)：62—70, 2021.
- 4) 武藤岳夫：入院治療開始時に考えること。精神科 2(2)：105—106, 2021.
- 5) 西川清子, 平山泰照：精神科慢性期病棟看護師が対応困難と感じる患者の特徴：共通評価項目と対応困難理由からの検討。日本看護学会論文集。精神看護 (50)：23—26, 2020.
- 6) 瀧下晶子, 出口禎子：民間精神科病院に勤務する新人看護師の体験から支援を検討する 夜間勤務の負担感と暴力・暴言を受けた体験に焦点を当てて。日本看護研究学会雑誌 42(3)：413, 2019.
- 7) 仲屋のぞみ, 竹村麻美, 齋藤 伸, 他：A 病院における精神科看護師の陰性感情が患者対応に及ぼす影響。日本精神科看護学術集会誌 58(2)：176—180, 2015.
- 8) 安永薫梨：精神科閉鎖病棟における患者から看護師への暴力の実態とサポート体制。日本精神保健看護学会誌 1(15)：96—103, 2006.
- 9) 伊東健太郎：暴言・暴力を受けた精神科看護師の気分と自尊感情、精神科看護への誇りについての検討。日本赤十字北海道看護大学紀要 12：9—17, 2012.
- 10) 金谷文代, 田村文子, 大澤真奈美：患者から暴力を受けた精神科看護師の感情に関する研究—暴力を受けた直後と現在の感情および介在した要因—。群馬県立県民健康科学大学紀要 10：39—59, 2015.
- 11) 佐藤雅美：入院環境における患者の暴力・暴言への対策。精神科治療学 31(10)：1323—1330, 2016.
- 12) Kitwood T M, Clive B, Andrea C: Tom Kitwood on dementia: a reader and critical commentary. Baldwin C, Capstick A, editors. McGraw Hill, Open University Press, 2007.

- 13) 鈴木聡美：認知症患者の攻撃的行動に対する認知症治療病棟看護師の観察視点及び看護ケアの実際. 三重県立看護大学紀要 21：11—18, 2017.
- 14) 有賀智也, 渡辺みどり, 千葉真弓：重度なBPSDにより精神科病院に入院した認知症高齢者への看護師の対応方法. 日本看護福祉学会誌 19 (2)：101—114, 2014.
- 15) 澤原光彦, 村上伸治, 青木省三：成人の精神医学的諸問題の背景にある発達障害特性. 心身医学学会誌 57(1)：51—58, 2017.
- 16) 楨平一隆, 丸山昭子, 井上善久, 他：精神科病棟入院患者の看護師に対する暴力に関する国内の文献検討. 長野県看護大学紀要 14：87—97, 2012.
- 17) 日下部祥子, 田嶋長子, 別宮直子：精神科看護における「対応困難」に関する文献検討. 大阪府立大学看護学部紀要 20 (1)：93—100, 2014.
- 18) 安永薫梨：精神科病院における患者から看護師への暴力の実態と看護の在り方—看護師に暴力を振った患者を対象とした質問紙調査より—. 福岡県立大学看護学研究紀要 7 (2)：72—81, 2010.
- 19) 沖野一成, 仁木辰哉, 富山弘美, 他：包括的暴力防止プログラムの院内教育に関する研究：録画したロールプレイ演習場面の振り返りを取り入れた学習の特徴. 日本精神保健看護学会誌 20 (1)：1—9, 2011.

別刷請求先 〒723-0053 広島県三原市学園町 1—1
 県立広島大学保健福祉学部保健福祉学科看護学
 コース
 井上 誠

Reprint request:

Makoto Inoue
 Prefectural University of Hiroshima Faculty of Health and
 Welfare Department of Health and Welfare Nursing Course,
 1-1, Gakuen-machi, Mihara-shi, Hiroshima, 723-0053, Japan

**Psychiatric Nurses' Interventions for Violent Patients in a Psychiatric Hospital:
 Through a Literature Review**

Makoto Inoue and Koji Aso

Prefectural University of Hiroshima Faculty of Health and Welfare Department of Health and Welfare Nursing Course

Purpose: Through a review of the literature, we extracted intervention methods and techniques for patients who cause abuse and violence as nurses working in psychiatry, and examined what kind of nursing interventions are effective.

Methods: The literature review was conducted using the Ichushi Web and CiNii databases as search media. After a search of articles on “psychiatry”, “verbal abuse”, and “violence” over the past 10 years (2011–2020), we extracted articles on “intervention research in psychiatric nursing” published over the past 5 years (2016–2020).

Results: The number of articles containing these keywords over the past decade (2011–2020) was 102 in Ichushi Web and 103 in CiNii, for a total of 205 articles. After excluding those that fell under the categories of, “abstracts of presentations”, “commentaries/features”, and “abstracts only” in the KAKENHI database, as well as duplicates in the prior databases, 95 articles were identified and included in analysis to identify what interventions were performed.

Discussion: In the future, it will be helpful for nurses and other healthcare professionals in psychiatry to have some knowledge of what kind of patients can be verbally abusive and violent, and how to respond to them, so that healthcare professionals can take measures to prevent adverse effects to their own mental health.

Conclusion: In this study, the intervention method for the patient who caused the rant and violence of the psychiatric nurse was extracted and arranged the technique which could be utilized through the literature examination, and the suggestion was obtained about what kind of intervention method there was, and an effective avoidance method.

(JJOMT, 70: 119—123, 2022)

—Key words—

psychiatry, rant, violence